

「第13回全国大学政策フォーラム in 登別」参加報告

概要

2018年8月27日(月)～29日(水)、北海道登別市にて「第13回全国大学政策フォーラム in 登別」が開催されました。本学からは3年生6名、2年生1名が2チームに分かれて参加しました。参加学生は、木村駿介君、小林昌平君、岡田悠志君(2年)(以上、Aチーム)、小保方海登君、春木翔太君、熊谷瞭君、森山雄生君(以上、Bチーム)の7名でした。引率教員として、岩橋俊哉教授と藤井が参加しました。

当該政策フォーラムは、登別市が抱える多種多様な課題についての解決策(政策)を提案し、全国から参加する大学と政策の質を競い合うという形で進められます。2006年に始まり、政策系、福祉系、工学系等の多様な専門領域のゼミが同じフィールドを分析し、それぞれの視点から課題解決のための政策提言を行う大会として老舗の位置づけとなっています。第13回目となる今回のフォーラムには、全国から8大学(埼玉大学、立教大学、流通経済大学、大東文化大学、浜松学院大学、金城学院大学、同志社大学、摂南大学)14チーム、97名の学生が参加しました。

登別フォーラムへの大東文化大学からの参加は、本年度で4回目となります。2016年度から政治学科のアクティブ・ラーニングとして本格的に実施しており、2017年度はさらに内容を充実させて共通講座の開催や事前学習時間を別途設定して実施してきました。2018年度もその流れを汲み、共通講座や事前学習を開催しながら対策を行い、登別フォーラムに参加しました。事前学習では、それぞれのチームが夏休みの中、大学に集まって議論を重ねたり、両チームが一堂に会して現在の状況を報告して講評しあうということも行ったり、しっかりと準備を行って現地に向かいました。

フォーラムでは、限られた時間の中で調査を行って政策を完成させていくことはもちろん、プレゼン時に使用するパワーポイントまで作成しますので、かなりのハードワークになります。また、提案にあたっては事前の下調べが必要になりますので、参加する学生には相当の負担が強いられることとなります。それらを手際よくこなしていき発表へと辿り着くのですが、これらをこなしていくためのマネジメント能力も求められます。学生の資質を向上させていくあらゆる要素が凝縮されているのが、この登別フォーラムであると言っても過言ではありません。

今年度のフォーラムで与えられたテーマは、「のぼりべつの魅力を掘り起こせ！！—『登別的6次産業』のススメ」でした。資源の宝庫と言われている北海道の登別市には多くの資源が眠っていますが、十分に活かされていない状況であるため、1次+2次+3次=6次のような平凡な発想を飛び越え、2次×3次、3次+3次など、自然や文化をはじめとする農業、林業、水産業、工業、食、レジャー、観光、などなど、ありとあらゆるコンテンツをコラボレーションし、新たな付加価値を産み出し、型にハマらない独創的で斬新な発想の登別的6次産業を創出する、とうことでした。本学の2チームは、「食の登別」(Aチーム)、「高齢者の力を活かした新たな六次産業の創出」(Bチーム)をテーマとし、調査を進めていきました。

事前対策において、ある程度「案」を煮詰めて登別に向かいましたが、フォーラム2日目のヒアリングで現地の実情や様々な制約の存在が判明し、どのように提言を修正して纏めていくかに苦労することになりました。ほぼ徹夜で発表準備を行い、3日目のプレゼンの場に臨みました。

発表は、参加14チームがそれぞれ8分の持ち時間でプレゼンを行っていきます。参加学生はもちろん、地元の方々の前でも発表するため、どのチームも緊張しながらプレゼンを行っていきます。時間を超過すると打ち切られますので、事前の練習も必要となります。他大学にも負けられないという状況でもあり、かなりのプレッシャーの中で各チームはプレゼンを行っていくこととなります。

結果、本学のBチームが、独創性に溢れる発表に与えられる「政策マネジメント研究所賞」に入賞しました。昨年は2位に入賞しましたので、2年連続入賞を果たすことになりました。残念ながらAチームは入賞を逃しましたが、両チームとも一つの事を最後までやり遂げたという達成感や充実感に満たされていました。このフォーラムに参加して大きく成長したと思えます。

1日目 8月27日(月)

成田空港に9時30分頃に各々到着したメンバーは、10時25分発のLCCに搭乗し新千歳空港へと向かいました。到着すると曇り空も相まってかなり肌寒く感じられ、東京と違い北海道は既に秋であると実感しました。

空港に到着後、予定していたバスの乗り場が分からず乗り遅れるというアクシデントが起きましたが、登別フォーラムの事務局へ連絡してバスチケットの入手し、他のバスに乗車して大幅に遅れることなく登別温泉へと到着しました。



登別グランドホテルへ向かうメンバー

アクシデントを乗り越えようやく到着

14時30分に登別グランドホテルに集合し、政策フォーラムが始まりました。今年も昨年に引き続き、1日目は市内見学を行います。観光バスに乗車して市内の要所を回ります。大地がまさに生きているように感じた地獄谷展望台、海の幸があがる登別漁港、登別川の深い谷を渡る登別新大橋を經由し、北海道の雄大さが感じられる札内台地、老朽化が否めない登別市役所を案内して頂きました。



間欠泉を覗く



雄大な札内大地

その後、開場に到着し懇親会となります。懇親会では各チームの紹介、発表の順番のくじ引きを行い、他大学生と歓談し交流を深めました。大東文化大学の発表はAチームは2番、Bチームが8番となりました。



会場の様子



様々な大学のメンバーが卓を囲む

2日目 8月28日(火)

2日目はヒアリングの日です。各チームとも事前に申請してヒアリング先の方に質問し、現地の情報を聞き出します。Aチームは登別市商工労政グループ、農林水産グループ、登別市社会福祉協議会から、Bチームは登別市商工労政グループ、障がい福祉グループ、登別市社会福祉協議会に加え、地域食堂のゆめみーるへの視察を行いました。政策提言(案)をヒアリング対象者にぶつけてみて反応を見たり、現場の状況を教えて頂きながら、現状を把握していきます。3年前には、このヒアリングで大どんでん返しを食らい、事前に作ってきた案を徹夜作業で再度構築し直したことがあります。今回はそのような大外科手術は無かったですが、聞き出した情報を元に、自らの提案を変化させ、実現可能な提案へと仕上げていきます。



Aチームのヒアリングの様子



Bチームのヒアリングの様子

ヒアリングを終えると、宿泊する登別グランドホテルに帰り、政策提言への準備を進めていきます。それぞれの部屋で、深夜まで発表の準備を進めていきます。目処が合った頃に教員の前で予行演習を行い、藤井からは「容赦ない」ダメだしが行われました。提言の組み立て、ロジック、パワーポイントでの見せ方等、気づいた点がどんどん指摘されます。その指摘を受け入れる、入れないはチームの方針次第です。どうすれば提言が分かってもらえるかをよく考えながら、指摘された箇所に対して再度議論を行い、完成に近づけていきます。そのような形で作業を進めていき、AチームBチームとも最後の練習を終えたのは午前3時半を経過する頃でした。政策提言に向けて、一丸となって眠たい目をこすりながら一生懸命に向かいあった経験は、この先の人生で必ずや役に立つことでしょう。



Bチームのプレゼンの練習の様子



指摘箇所を議論し修正する様子

3日目 8月29日(水)

僅かな睡眠をとった後、簡単に朝食を済ませて会場行きのバスに乗り込みます。Aチームは2番目に発表、Bチームは8番目に発表でした。Aチームは岡田君が、Bチームは春木君が発表を行いました。それぞれの発表原稿を掲載しておきます。

Aチーム
はじめに

それでは大東文化大学 A チームの発表を始めます。

今回のテーマは「新たな登別の6次産業の創出」ですが、その政策を提言していくにあたって、私たちはまず、登別の名産品に着目しました。登別市には多くの名産品がありますが、市外の人でさえも「知らない」、「食べたことがない」、という状況が起きています。今回はその名産品の一つである「閻魔焼きそば」を取り上げながら、学校給食を舞台にしてこの問題を解決していこうと思います。なぜ学校給食を舞台にするかというと、①身近なものであり、②幼い時から馴染み深く思い入れがあり、③効果が広く・継続して及びと期待される、の3点が考えられるからです。

さて、今回取り上げます「閻魔焼きそば」についての現状ですが、登別市内での認知度は80%を占めるものの、実際に食べたことがある人は全体で3割しか及びません。また、食べたことがある人の中でも回数は2~3回となっており、地元の産品でありながら、あまり食べられていない状況となっています。「閻魔焼きそば」を提供している店舗が約30店舗ほどありますが、平成28年度のアンケート結果からは、市民の方々が食べる機会が少なく、市民の人々と距離があるような現状と思われるます。

このような状況を改善し、新たな展開を目指していくために、私たちは「食と愛でつながる登別プラン」という政策を提案したいと思います。このプランは3つの柱で構成されています。1つ目は「公募による地元食材の調達」、2つ目は「子供への効果的な浸透」、3つ目は「生産者の声の伝達」です。それでは、この3つの柱について説明していきます。

1つ目の柱は「公募による地元食材の調達」です。「閻魔焼きそば」のルールとして、「地場産品を1品以上使用しなければならぬ」という制約（「閻魔大王の掟」）があります。しかし、とれたての魚介類のような地場産品を使用すればコストが高くなり、徴収している給食代では収まらない状況となります。また、給食として出すには、ある程度の纏まった量の食材を確保する必要があります。現在、登別市では給食センターで作ったものを各学校に送達している形で学校給食を提供していますが、例えば「登別豚」を利用するならば、「豚もも肉」という一定部位を数百キロ確保する必要があり、食材の確保は容易ではありません。

このような制約があるなかで、「閻魔大王の掟」に従いながら学校給食で「閻魔焼きそば」を提供していくには、より入手しやすく一定量が確保できる地元の食材を使用することで、実現が可能になると考えられます。そこで、「閻魔焼きそば」の食材の調達を円滑に進めていくために、「食材提供の公募」を行います。生産者の中には地元の子供達に自らが生産した産品を食べてもらいたいと思う方が存在すると考えられます。それらの方々の篤志に期待し、一定程度の纏まった量の地元産品を低価格で提供して頂くことを募集していきます。ここで主に募集するものは、通常の市場では販売できない「規格外のもの」を考えています。生産者は規格外の産品を買い取ってもらえるというメリットを享受でき、そこから派生して通常の産品も提供していくことへの架け橋とし、新規の生産者の市場開拓の機会の創出に繋げていきます。このことにより、通常の市場には出せないようなもの給食で消費することにより、地産地消の形になり、地域内の経済が活性化していく流れを展望していくことが可能となります。

加えて、近年の問題としてエゾシカの生活環境への侵入が挙げられます。その解決策として毎年200頭~400頭のエゾシカを駆除しています。現在このエゾシカを加工し鹿肉として販売もしております。この鹿肉も登別の1つの特徴であり、また学校給食に出すことも現在は難しい状況であるとしても必要な技術や人材が増えることで将来的に可能ではないでしょうか。

2つ目の柱は「子供達への効果的な浸透」です。私たちの政策は、登別の名産品を知ってもらうために、学校給食を利用して子どもたちへの浸透を図っていくのですが、この浸透にあたっては、より効果的な方法で「閻魔焼きそば」を提供していきます。そのために私たちは、「閻魔大王」の素性に着目しました。人間は死後、閻魔大王を含めた十王という裁判官によって生前の行いを裁かれます。そして、登別で有名な閻魔大王は命日から35日目に裁きを下すとされています。そのことから学校給食で「閻魔焼きそば」を提供するにあたっては、「閻魔に会える日」ということで3日と15日の月二回に提供します。もちろん閻魔大王に会えるからといって子供達を怖がらせるという目的ではなく、登別の、ある意味象徴的な閻魔様を給食という枠を通じて体感してもらえれば良いのではないかと考えています。私たちの挙げた例はあくまでも一例であり年度によって変えたり、栄養バランスやイベントに合わせて提供のタイミングというものはその都度変更し、より良い形を構築していただくことを考えています。

3つ目の柱は「生産者の生の声」を届けることです。食材の生産者の方には、当然のことながら食材を提供してもらうのですが、その際には、生産者の方から児童や生徒に対して、「地元に対する想い」をコメントなどでいただき、それらを給食の時間に校内放送や様々な形で子供達に伝えていくことを行っていきます。また、食材を提供してもらった生産者の方々に学校に来て頂き、どのような思いで地域で食材を生産しているのか、登別に住み続けることにはどのような意味があるのか、等を講演して頂く機会を提供し、生産者の思いを子ども達に伝えていくことを行います。これにより、児童や生徒が地元のことをより理解し、好きになっていくような仕掛けを提供していきます。これを継続させていくことにより、地元のことをより深く知ることにより子供達自身の地元愛へとつながり、将来的にはこの登別市に住み続け、貴重な働き手となります。さらに登別市だけでなく札幌市や隣の伊達市も含め、この北海道というところに人が増えていくということも視野に入れていくことで、高齢化が進むことへの歯止めの1つにも繋がるのではないかと考えます。

以上この3つの柱が「閻魔が見守る登別」になります。

最後に、今回は市民の方々へのアピールに主に重点をおきましたが、市民の意識に名産品が浸透されることによって、将来的な展望として自然に観光客や市外へと名産品のアピールが強まっていくことが見込まれます。学校給食という公的なものを利用しつつ、市内や周辺地域の生産者の方々へのビジネスチャンスも広げながら、子供達から地元愛というものを育てていこうという今までの枠にとらわれない新たな6次産業の1つとして私たちの提案とさせていただきます。

以上で、私たちの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

B チーム

これから、大東文化大学 B チームの発表を始めます。

今回与えられた課題は、「ありとあらゆるコンテンツをコラボレーションし、新たな付加価値を生み出し、型にハマらない独創的で斬新な発想の登別の6次産業を創出すること」です。この「ありとあらゆるコンテンツをコラボレーションする」という点について、私たちが着目したのが、「高齢者のマンパワー」、「高齢者の知恵」、「高齢者の経験」です。これらを活用しながら、新たな付加価値を生み出していこうと思います。

まず、なぜ、このように高齢者に着目するかを説明すると、現在登別市では人口減少と高齢化が進んでおり、65歳以上の方の増加が見込まれる一方で、介護を担う事ができる家族や介護に従事する方は減少するということが深刻化しているからです。この点については、「広報のぼりべつ」2018年8月号によれば、登別市の人口は、平成30年6月末現在で4万8千548人。そのうち、65歳以上の方は1万7千134人であり、市民の3人に1人が65歳以上という状況であると述べられており、じわじわと高齢化が進んでいることが浮き彫りにされています。

では、このような状況が今後劇的に改善されることは、見込めるものでしょうか？全国的にどの地域でも同じような課題に直面し、苦しんでいるのが現状です。特効薬が見出せないため、今後はさらに状況が悪化していくのではないのでしょうか。ならば、その状況を悲観するのではなく、逆手にとって、高齢化が活躍するような社会を目指し、どの地域よりも輝くような登別市を追求していくことが良いのではないのでしょうか。したがって、私たちの発表では、「高齢者のマンパワー」、「高齢者の知恵」、「高齢者の経験」を使い、新たな付加価値を生み出し、光り輝く登別市へと導いていく政策を提案していきたいと思えます。なお、提案に先立ち、私たちは登別市社会福祉協議会、商工労政グループ、障がい福祉グループ、NPO法人「ゆめみーる」への聞き取り調査を行いました。

現在、全国各地で高齢者の「マンパワー」、「知恵」、「経験」を活かした取り組みが展開され、活性化しているまちが見受けられます。授業で習った、徳島県上勝町の葉っぱビジネスの事例や、滋賀県長浜市のプラチナプラザの事例、豊田市足助町のZiZi工房、バーバラはうすの事例などがあります。

次に登別市での実践です。全国的に展開されている高齢者を利用したビジネスを紹介しましたが、現在の登別市での実践がどのようになっているのかを確認します。登別には、「儲け」を追及するというのではなく、来る人が気軽に好きな時間だけいることができるような居場所づくりとして、「ゆめみーる」が地域食堂を営んでいます。そこでは釣った魚や山菜、野菜類を提供してくれる人もいて、安い価格で食事を出しています。地域で福祉に関心が強まり、協力したいという人も増えているため、「ゆめみーる」が地域の格好の居場所になっています。高齢者が働ける場を作ることにより、高齢者の方々が生きがいを見つけるとともに、高齢者同士の交流が生まれています。

登別でも既に高齢者の居場所づくりを活用した動きがありますが、今回の私たちの提案では、「儲け」を追及する要素を前に出し、新たな付加価値の創造を提言します。私たちの提案するのは、「ZiZiBaBa 鬼稼がせプラン」です。それでは、「ZiZiBaBa 鬼稼がせプラン」の提言について説明します。

登別市には、登別漁港、鷺別漁港があり、中でも登別漁港は、いぶり中央漁業協同組合所属船の利用ばかりでなく、全国各地からのいか釣り漁船が利用する漁港となっています。2つの漁港で水揚げされる、ホッケやスケトウダラなどの食材を使います。水産物の加工製造を通じた地場産品の消費拡大と漁業振興のため、加工と販売を行う海鮮工房を作ります。具体的には、海鮮工房を町内の空き店舗に構え、そこで水産物を加工します。販売は駅や観光地、ホテル、サービスエリアなど様々な場所で行います。販売する者は、稼ぎたい人が稼ぎたいときに稼ぎたい分だけ、海鮮工房で水産物の加工品を仕入れて、各地で市民や観光客に販売します。加工品は、日持ちするような魚料理である、押し寿司や南蛮漬、漬け物などを登別で獲れる魚を使って作ります。商工労政グループの補助や「ゆめみーる」が10年行ってきた事業の蓄積を活用して、「ゆめみーる」の事業拡大を行っていただきます。登別市の高齢者の知恵と労力を活かすため、20人~30人程度の高齢者を雇用し、報酬を支払います。これらの方法で、まだ活躍できる高齢者を活用します。

「ZiZiBaBa 鬼稼がせプラン」の効果は、対話やふれあいにより、大型店とは違う買い物の楽しさという価値を提供しています。地元住民との対話やふれあいにより生まれる笑顔や笑い声が町の活力となり、賑わいあるまちづくりに貢献しています。頭と情報を駆使してお金を稼ぎ、社会の役に立てる喜びを取り戻したことで、高齢者はみんな元気で若々しく、楽しそうに仕事をするようになります。高齢者に役割を与えることで、得た儲けを高齢者に還元する循環を得ることができます。高齢者の自立や介護する側の負担を軽減することで、高齢者自らが働くことにより介護予防につながるのではないかと思います。その結果、老人ホームが少なくなり、高齢者の居場所の拡大や社会福祉費用の削減が期待できます。

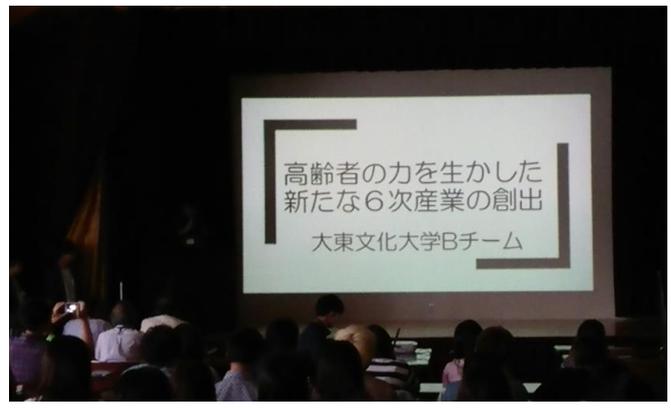
以上により「高齢者のマンパワー」、「高齢者の知恵」、「高齢者の経験」を活用し6次産業を組み合わせることで、新たな付加価値を生み出すことができるのではないのでしょうか。

以上で、大東文化大学Bチームの発表を終わります。ご清聴ありがとうございます。

会場には、他大学生、審査員や関係者等、約120人がおりました。それらの人々を前にして、発表を行いました。特に2年生の岡田君は、登別フォーラムの面白さに惹かれ、自らを成長させようと一人で参加した意欲的な学生で、3年生ばかりの中でしっかりと自分を持ち、果敢に取り組んでいた姿が印象的でした。



Aチームの発表（発表者：岡田君）



Bチームの発表（発表者：春木君）



発表を終えた岡田君



Aチームの発表後、審査員からコメントを頂く様子

どちらのチームとも、限られた時間の中で精一杯頑張ったことを発表の場ですることができました、審査員のコメントも不足する点を指摘されるものではなく、どちらのチームも入賞するのではないかと考えてなりませんでした。

結果は、Bチームが「政策マネジメント研究所賞」を頂くことになりました。審査委員長からの講評では、全ての提言のレベルが高く、甲乙つけ難い状況であったとのことでした。残念ながらAチームは入賞を逃しましたが、見ていてかなりレベルが高い提言のものであったと思えました。恐らくは僅差で入賞を逃したものと思われます。



Bチームが表彰される様子



Bチームのメンバー



参加メンバー同



あと、今回の登別フォーラムでは、最後に今後のあり方を再確認するパネルディスカッションが開催されました。

登別フォーラムは、登別市議会の松山議員と同志社大学の故今川晃先生が議員研修会を通じて知り合い、意気投合して開催されることになったという経緯があります。その狙いとしては、公共政策におけるいわゆる「OFの知識」と「INの知識」を実際の地域を舞台に学ばせてもらうと共に、地元の方々へよそ者からの「気づき」を提供するという形にしていくのがそもそもの趣旨です。パネルディスカッションでは、立教大学の外山公美先生が司会者となり、同志社大学の真山達志先生と登別市議会の松山議員と藤井が壇上に上がり、そのようなフォーラムの原点を確認し、今後について多方面から検討していきました。本来なら今川晃先生が登壇すべきところですが、私が代わりに務めさせて頂き、自らの経験談を踏まえて多少語らせて頂きました。また、参加学生からも率直な声を聞き、今後のフォーラム運営への課題として認識していきました。

登別フォーラムは、毎年の反省を踏まえて大会運営がブラッシュアップされています。毎回、毎回、進化しているのが登別フォーラムの素晴らしいところです。



パネルディスカッションの様子

おわりに

今回のフォーラムでは、Bチームが入賞を果たし、結果を残すことができました。Aチームは入賞を逃しましたが、完成度についてはかなりのものであったと思います。何よりも、最後まで諦めず、提言する政策の質を向上させてやり遂げたことが大きな財産になったものと思われま。恐らくは、「お金を払って何故こんな苦勞をしないとイケないのか」と思ったことでしょうか。しかし、苦勞をした分、それがそのまま自分の財産となっていることに気づく時がくることでしょうか。今後の人生で、様々な壁が目の前に立ちはだかることでしょうか。その際は真摯に向き合い、今回の経験を基にして乗り越えていってほしく思います。

あと、今回のフォーラムでは、大きな収穫がありました。2年生の岡田君が大きく成長したことです。岡田君は2年生でありながら1人で登別政策フォーラムに参加し、3年生と共に政策を考え、発表までも行い

ました。かなりの自信と度胸がついたことでしょう。残念ながら今回は入賞を逃しましたが、今後のチームリーダーとしてメンバーをまとめ、引っばっていく存在になっていくことでしょう。

最後に、1位になれなかった、入賞しなかった原因は何だったのかを考えていくことが、今後社会で活躍していく自分をイメージする上での思考材料になるのだとも思えます。現状に満足せず、何が足らなかったのかを常に考えていく姿勢、前回到達できなかったものを次回は乗り越えていくという姿勢が問われているのだと思えます。政策フォーラムは京田辺もありますし、来年の登別もあります。是非次回もチャレンジしてほしいと思います。

参加学生の声

小保方海登 君（3年生）

私たちは、のぼりべつの魅力を掘り起こせ！！～「登別の6次産業」のススメ～というテーマに対して「高齢者の力を活かした新たな6次産業の創出」を提言に掲げ作り上げてきました。私は2月に京田辺で開催された政策フォーラムにも参加させていただきましたが、今回のフォーラムでは大東文化大学Bチームのリーダーを任されての参加だったので新鮮な気持ちでした。フォーラムにおける目標として入賞を狙うこともありましたが、私自身のもう1つテーマとしてチームをまとめ上げるというものを大事にして取り組んできました。私はリーダーとして原稿やパワーポイントの作成や全国の事例探しといったチームのバックアップにまわる役目を担いましたが、チーム全体の進捗状況や方向性の舵取りといった役目を果たすことの大変さを経験できました。

今回の舞台である登別市の名前は聞いたことがありますが、普段の町の様子や取り組み、産業についての知識はなかったので調べ上げるところから始め、そこから見える登別市の抱える問題が明確に見えてきてその問題点と6次産業を組み合わせ政策提言の考えや実現可能に近いものを作り上げようと決まりました。作業を進めていく中で実現可能という言葉に捉われ壁に当たることもありましたが、そこで取って代わるべきことの大切さも重要であり人の印象に残るようなインパクトを与える工夫もなしました。

このようにチームのみんなで1から登別市について調べ上げ、高齢化という問題に焦点をあて高齢化の問題を逆手にとった発想の転換を使い、全国でも高齢化を逆手に取って成功した事例を探り、大東文化大学Bチームならではのアイデアを纏めました。これらの作業においてはチーム1人1人のおかげで素晴らしいものを作り上げあげられるだろうと確信できました。

最後に、私はリーダーでありながらみんなに支えられる場面も多々あり、時にはみんなを支え、リーダーという枠に捉われずチーム全体で支え合いながらやってきたという印象が強く残りました。ほかにも大東文化大学Aチームという最高の仲間であり競い合っていくライバルが隣にいてくれたことやBチームの心強い仲間達、後ろから支えてくれた藤井先生と岩橋先生、ヒアリングに協力していただいた登別市の皆様といった方々のおかげで政策マネジメント研究所賞に入賞する事ができたのだと感じておりとても感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

今後この経験はなにか企画や提案をする機会がある時などに自分が何をすべきか、相手は何を求めているのか、その上でどう活用していくのか現状の与えられたもので解決することや提案していくことにいきると確信しており、脳に汗をかくことができた経験はどの状況でも活用していけるものだと思っています。

岡田悠志 君（2年生）

(1)登別フォーラムに参加した感想

今回この登別フォーラムには初めて参加させて頂きました。参加のきっかけは面白そうだなという興味本位からでした。しかし、いざ政策立案に取り掛かると、とても難しく複雑でかなり大変な思いをしました。テーマが「新たな登別の6次産業の創出」であり考察範囲が広く、自分たちのテーマを決めることにも時間がかかりました。徐々に政策が固まりつつある中で、登別市の給食センターの方へメールでいくつか質問をし、実現可能性を模索していく中で自分たちの考えていたことが不可能であるとわかった時は、本番に近かったこともありとても焦りました。そのような中、先輩方と協力して最終的に1つの発表ができた時はとても嬉しかったです。自分達のチームは賞を取ることはできず悔しい思いをしました。このような経験ができて本当によかったと思います。

(2)フォーラムの参加を通じて何を学んだか、どんな成長をしたか

普段の学生生活を送っていく中で、講義を受ける時は基本、座学であり受け身の体制で授業を受けることがほとんどであると思います。しかしこの政策フォーラムではもちろん自分たちの力でたくさんのことを調査し、先生方にアドバイスを頂きながら議論をし、意見を出し合い1つのものを作っていくということが必要になります。普段の授業では経験できない参加メンバーとの協調性を育むことができ、また、自分たちで成し遂げる力というものを学ぶことができ、社会に出るときに必要な能力を得ることができたと思います。さらに政策立案の過程と言うものを疑似体験的に学ぶことができ、政治学科の学生としてとても成長できたと思います。

(3)学んだことを今後どう活かしていくか

今回学んだことは普段の学生生活のみならず、就職活動時や、目標が公務員であるので公務員になることができた後にこの経験を活かしていきます。もちろん次回の政策フォーラムにも活かしていきます。

最後に、1人だけ2年生でありながら快く迎えていただいた先輩方、藤井先生、岩橋先生、本当にありがとうございました。

春木翔太 君(3年生)

①登別フォーラムに参加した感想

今回、登別フォーラムに参加するにあたり、6月頃から仲間と一つの目標に向かって勉強することができました。今回与えられたテーマは、非常に難しかったですが仲間と意見を交換し合いながら、少しずつ形にしていくことができました。北海道には行ったことがなく、登別市も知らなかったので、市のホームページを隅々まで見て、その地域の課題などを挙げていきました。新しい発見が多かったです。

発表原稿作りは、自分の考えをうまく文字に起こすことができず、文章の構成などにも苦戦しました。大勢の方々の前で発表では緊張しましたが、はっきりとゆっくり喋ることを心掛けました。また、登別フォーラムには全国から14のチームが参加しており、法学部だけでなく経済学部など、それぞれの学部により目の付け所が異なっていたため、発表を聞いていてとてもわくわくしました。

②フォーラムの参加を通じて何を学んだか、どんな成長をしたと思うか

今回のフォーラムでは、3つのことを学びました。

1つ目は、アクティブラーニングの大切さです。アクティブラーニングは、学生が自ら動いて行動しなければ進まないで、自分の意見をまとめ、それらを相手に伝え議論していくことの難しさを痛感しました。しかし、その先には達成感がありました。

2つ目は、仲間との協力です。それぞれチーム内で役割分担をして、取り組んでいきました。役にこだわらずに気づいたところがあれば、言えるようなチームになりました。

3つ目は、自ら動いて調査することの重要性です。普段は、疑問に思うことがあれば、インターネットで調べ、解決をして終わっていました。しかし、政策を考えるとしっかりと裏付けが必要となるため、市の職員や地元の方々へヒアリングを行いました。お話を聞いていると、自分が調べてきた登別の事情とは違ったり、地元の方々の考えなどを聞くことができ、現地へ足を運ぶことの重要性が分かりました。

③学んだことを今後どう活かしていくか

私は、埼玉県警察を志望しています。職務を行うにあたり自発的に考え、行動する大切さ、集団で生活するにあたっての仲間との協調性、現場へ足を運ぶことの重要性など今回登別フォーラムで経験したことが活かせるのではないかと思います。また、ゼミでの論文執筆などにも活かしていきたいです。

最後に、ご指導頂いた藤井先生、岩橋先生、ありがとうございました。

熊谷暁 君(3年生)

①登別フォーラムに参加した感想

今回の政策フォーラムでは『「登別6次産業」のススメ』というテーマのもと5月から事前学習を行ってきました。まず登別市について全く知識がない中で登別市を調査しつつ自分たちの政策テーマの提言についてBチームのメンバーと多くの意見を出し合ってきましたが、自分たちが納得できるようなテーマが思いつかず良い提言ができるかどうか不安でした。しかし最終的には実際に行ったヒアリング、登別市が抱えている高齢化問題、登別で採れる食材などを参考に「高齢者の力を生かした新たな6次産業の創出」というテーマのもと満足できる提言ができたと思います。そして発表終了後審査員の方々に称賛の言葉をいただいた時には自分たちがやってきたことは無駄ではなかったと安心することができました。結果的には「政策マネジメント研究所賞」という賞をいただくことができ大変うれしいです。また他大学の発表を聴いたことで自分たちには足りなかった点、新たな課題を発見することもできました。これも貴重な経験だったと思います。今回このフォーラムに参加させていただいたことは今後の自分にとってプラスとなり良い思い出となりました。

②フォーラムの参加を通じて何を学んだか、どんな成長をしたと思うか

実際に現地の方々の声を聞くと自分が想像していた答えとは違った答えが返ってくることや新たな問題点が見つかることがあるということが改めてわかったのでただインターネットや本などの資料で問題点や改善点を考え、判断するのではなく現地でヒアリングや自分自身で入手した情報が重要であるということがわかりました。また今回行ってきた事前学習そしてフォーラムでの3日間というのは積極的に学ぶ姿勢、チームでの協力性の重要さということも改めて感じる事ができ今後の自分自身の学習への取り組み方という面では色々と考えさせられるものがありました。

③学んだことを今後どう活かしていくか

今回のフォーラムで学んだ経験、現地で得る情報の重要さというのは今後論文作成をしていく中で活かしていけると思います。また今後パワーポイントや原稿を作成する機会は大学や就職後でも多々あると思います。その時には今回重点に置いた相手にわかりやすく説得力のある原稿やパワーポイントの作成を目指し、フォーラムで他大学の提言を聴いたことでわかった反省点、改善点等を活かしていきたいです。

木村駿介 君(3年生)

私は今回の登別の政策フォーラムは京田辺の政策フォーラムと合わせて2回目の参加になります。今回は藤井先生のゼミ生以外にも有志でやる気のあるメンバーが集まりました。京田辺での参加経験があった私は今回のフォーラムではその有志のメンバーで構成されたチームのリーダーとして参加しました。メンバーはこのフォーラムで初めて集まった面々であったため、腹を割って話せるようになることにやや苦労しましたが、ミーティングを重ねるに従ってお互いが率直に意見を述べられるようになりました。私はそんなチームだからこそ、乗り越えられるのではないかと思いますようになりました。

ミーティングではチームの方向性が定まらず不安に思う時もありましたが、先生方のアドバイスや、メンバーの協力によって最終的には登別の食に関する方向性で確立しました。

フォーラム初日はバスに乗り遅れるなどのアクシデントもありましたがなんとか辿り着くことができました。市内案内では登別の雄大な自然を感じることができました。

2日目にはヒアリングをする先方の方々にいらしていただき、貴重なお話を聴き、それを踏まえて修正や付け足しを行ないました。大きな修正がなかったのも、あまり夜遅くまで作業をせず済むと思ったのですが、やはりそうはいかず、様々な調整や読み合わせ練習を行ない結局は深夜までの作業になりました。私自身は今回、原稿作成や、パワーポイント作成はメンバーが引き受けてくれたので、サポートやアドバイス、連絡調整に努めました。

最終日、発表を行なう2年生のメンバーがやや緊張をしていたので、あくまでも自分は平静保っているように振舞いましたが、内心は自分自身も緊張で落ち着きませんでした。

いよいよ発表になり、メンバーが話し始めました。私は舞台の下の端で審査員の方々の表情から目が離せませんでした。自分たちとしてはかなり手応えのあった発表であったと感じました。他のチームの発表もやはりよくできていて、かなり出来としては拮抗しているように感じました。

しかし、結果としては入賞はできませんでした。やや思うところはあるものの、結果は結果として受け入れ、メンバー各々が様々なかたちでフォーラムに関わり雪辱を晴らそうと思ったのではないかと思います。私自身としては入賞できた経験とできなかった経験の両方をする事ができてよかったと思っています。そして、今後の生活では、この経験と想いを胸に邁進して行きたいと思っています。

森山雄生 君(3年生)

第13回全国大学政策フォーラム in 登別に参加した感想として、私自身このように全国から大学生が集まり、大勢の前で発表をする大きな企画に参加することが初めてということもあり、他大学の発表や、現地の方の生の声を聞くことで、他では味わえない貴重な体験をすることができました。登別市に行くことも初めてだったのですが、実際に行くまでに調べていたことが、現地の人からの意見や、その場に訪れることによって見たり聞いたりしていく過程で一致していたりすると面白いと感じました。機会があればまた登別市を訪れたいと思いました。

まず発表までの期間中にチームのメンバー達と何度も大学に集まり構成を練るのですが、私はその作業中に生まれる一体感や、集中力、努力することでしか味わえない達成感を、この場を通じて得ることができました。登別市に着いてからも、現地調査やヒアリングを行うことで、現地に行くことでしか知ることのできない情報を手に入れることができ、その情報のもと、メンバー全員で協力しあい、発表に向けて努力することの大切さを学ぶことができました。他にも、メンバー全員で朝になるまで、発表の練習や作業をしたことを、私は今後忘れることのない大切な思い出になるのではないかと思います。発表の成果として、政策マネジメント賞を受賞することができましたが、私はこの成果よりも、この賞を取るまでの過程や、努力した思いを自分の中の一番の成果として大切にしていきたいと思っています。

私はこの第13回全国大学政策フォーラム in 登別で、政策を作ることの難しさや、大勢の前で発表をする経験を得ることができました。3日間という短い期間ではありましたが、メンバー全員で努力し、本気でこのプログラムに打ち込めたのではないかと思います。今後、ゼミの論文提出や、大学での勉強、就職活動などの際にこれらの経験を活かし、努力していけたらと思います。

小林昌平 君(3年生)

①登別フォーラムに参加した感想

はじめに政策フォーラム参加にあたり藤井先生、岩橋先生をはじめ多くの方にご協力いただき無事終えることができました。本当にありがとうございました。政策フォーラムに参加したのは今回が初めてでした。そのため最初は不安でした。しかし共通講座や事前学習を行う中で自ら質問し、考え、話し合う中で今足りないことを把握し、疑問を少しずつ無くしていくことができました。その結果、無事に発表当日を迎えるこ

とができました。また私自身アクティブラーニングの1つである登別政策フォーラムに参加を決めた理由は2つあります。1つ目は大学でできる活動に積極的に参加し、今後社会人になってから糧となる経験を学生の内に積みたかったからです。2つ目は個人ではなくチームで1つのものを完成させることで新たな気づきや学びに繋がると考えたからです。

②フォーラムの参加を通じて何を学んだか、どんな成長をしたと思うか

フォーラム参加を通して特に学んだことは「積極的に取り組む力」です。私自身大学生になるまで主体的に参加するということがありませんでした。しかし大学では選択肢を増やしたいと考えたため登別で行われる全国大学政策フォーラムへの参加を志願しました。最初は話をまとめたり、議論の的を得た意見を述べるのが難しく上手くいきませんでした。しかし、自ら考え困ったときにはお互いに協力し合いました。その結果自分1人では気づけなかったことを知ることもできました。また失敗したことをノートに書き留めて、失敗を1つずつ無くすようにしていきました。その結果、少しずつ失敗が成功に変わっていきました。そして自信も生まれました。失敗をそのままにせず、小さな成功体験が私自身の動機の1つとなり「積極的に取り組む力」を身につけることができました。

③学んだことを今後どう活かしていくか

今回学んだことは政策提言だけでなく今後様々な問題や課題に直面したときには、何が問題かを判断してそれを抽出したときに改善策を提案し、解決策を考えるときに必要なことだと考えます。また現地ではヒアリングを行いました。そして様々な方々からお話を聞かせていただきました。その中では相手方に対して適当なマナーが求められます。言い換えるならば、社会では1人の人間として責任と自覚が問われていると思います。

なので、今回登別市の政策提言の過程で自ら学んだことは仕事の場面だけでなく今後あらゆる困難にぶつかったときにも活かしていきたいです。